

時は短くなっている

I コリント人への手紙 7章 25-40 節

はじめに

コリント人への手紙第一の 7 章は、クリスチャンとして結婚、離婚、再婚、独身のことをどのように考えたらよいのかが書かれています。

今日の聖書箇所には、「**未婚の人たちについて**」のパウロの「**意見**」が書かれています。まだ結婚していない若者たちが結婚すべきかどうか、夫を亡くしたやもめたちが再婚すべきかどうか、ということのパウロの意見が書かれています。

25 節にあるように、ここに書かれているのはイエス・キリストの命令によるものではなく、あくまでもパウロの意見です。ですから、ここに書かれているパウロの意見に従わなくても、「**罪を犯すわけではありません**」(7:28、36)。しかしそうであっても、パウロの個人的な意見だからといって、聞き流してよいというものでもありません。パウロは、イエス・キリストの「**あわれみにより信頼を得ている**」人ですし(7:25)、「**神の御霊をいただいている**」人です(7:40)。ですから、私たちが耳を傾けるべき大切なことがあるはずなのです。

では、「未婚の人たちについて」のパウロの意見とは、一言で言うとどういうものでしょうか？それは、未婚の人たちは結婚しないほうがよい、再婚しないほうがよい、というものです。もちろん、これはパウロの意見ですので、結婚や再婚をしたからといって、罪を犯すわけではありません。パウロは、結婚や再婚を否定しません。しかし 38 節にあるように、「**婚約者と結婚する人は良いことをしており、結婚しない人はもっと良いことをしているのです**」と言ったり、40 節では再婚しないほうが「**もっと幸せです**」と言ったりします。

パウロはなぜここまで、独身でいることを勧めるのでしょうか？パウロは今日の聖書箇所で、その理由をいくつか挙げています。

1. 差し迫っている危機のゆえに

一つは、26 節にあるように、「**差し迫っている危機**」があったからです。これは、具体的に迫害を意味していると思います。当時、各地でクリスチャンに対する迫害が起こっていました。コリントでも、パウロが開拓伝道をした時には、ユダヤ人からの迫害がありました。これからコリントでも、迫害が激しくなることが予想されました。そのような中で結婚することは、「**身に苦難を招く**」ことになるかとパウロは思ったのです。

独身であれば、自分のことだけを考えていればよいですが、結婚すれば夫や妻のことも

考えなければなりません。子どものことも考えなければなりません。迫害の中で、愛する夫や妻、子どもが苦しむ姿を見なければならぬかもしれません。信仰か、家族かの選択を迫られ、心が引き裂かれるような経験をしなければならぬかもしれません。愛する者が増えれば増えるほど、迫害の中では苦しみや悲しみも増していくのです。だからこそパウロは、独身のままでいるほうがよいと勧めるのです。

2. ひたすら主に奉仕できるようになるため

もう一つパウロが独身であることを勧める理由は、「**ひたすら主に奉仕できるようになるため**」です。独身の人は、イエス・キリストのことだけを考慮して生活することができます。しかし結婚すると、夫や妻のことも考えなければなりません。子どものことも考えなければなりません。そうすると、イエス・キリストのことだけに集中できなくなって、34節にあるように「**心が分かれて**」しまうのです。このように、心が分かれてしまう状態、心が集中できなくなる状態を、32節にあるように「**思い煩う**」と言うのです。この「思い煩う」という言葉は、「心配する」とも訳されます。

結婚すると、心配事が増えるのです。夫や妻のこと、子どものこと、経済的なことなど、たくさん考えなければならぬことが増えるのです。その分、イエス・キリストのことだけに集中できなくなるのです。

では結婚しても、イエス・キリストのことだけに集中すればよいではないか、家族のことは考えないで、イエス・キリストのことだけを考慮していればよいではないか、と言うかもしれません。しかし、そうであってははいけません。パウロは、別の手紙の中で、「**もしも親族、特に自分の家族の世話をしない人がいるなら、その人は信仰を否定しているのであって、不信者よりも劣っているのです**」(1テモテ 5:8)と言っています。結婚したら、家族のことを考えなければなりません。家族をほったらかしにして、イエス・キリストのことだけを考慮して生きるというのは、クリスチャンとしてふさわしくない生き方なのです。それは、イエス・キリストを信じない人よりも悪い生き方なのです。

クリスチャンは、結婚したならば家族のことも大切にしていかなければなりません。イエス・キリストと同時に、家族のことも大切にしていかなければなりません。それは非常に難しい生き方です。時には、家族の心配事で心が支配されてしまうこともあります。イエス・キリストのことを考えられなくなることもあります。しかし、イエス・キリストのことを考え、同時に家族のことを考えていく、それが結婚するということなのです。

パウロは決して結婚を否定しません。結婚しても罪を犯すわけではないと言います。ただ独身であれば、イエス・キリストのことだけを考慮して生活することができる、イエス・キリストのことだけに集中することができる、ひたすら主に奉仕することができる、と言うのです。だからこそパウロは、独身であることを勧めるのです。

パウロがここで、独身であれば「ひたすら主に奉仕することができる」と言っています

が、ここでの「奉仕する」という言葉は、「美しくそばで座る」という意味の言葉です。「ひたすら主に奉仕する」と聞くと、「手足を動かして忙しく奉仕する」というイメージを持ちますが、ここでの「ひたすら主に奉仕する」というのは、「ひたすら主のそばで美しく座る」という意味なのです。

この「ひたすら主のそばで美しく座る」と聞くと、まず思い出されるのは、イエス・キリストが愛された姉妹マルタとマリヤの姿です。ある時、マルタとマリヤは、イエス・キリストを家に招きました。するとマルタは、イエス・キリストを一生懸命もてなし始めました。一方マリヤは、イエス・キリストの足もとに座って、御言葉に聞き入っていました。マルタは、もてなしを手伝わないマリヤに段々イライラしてきて、ついに怒りを爆発させます。するとイエス・キリストはマルタにこう言われます。「**マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリヤはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。**」(ルカ 10:41-42)。

マルタが行なったもてなしは、決して悪いことではありませんでした。同じように、結婚することも決して悪いことではありません。しかし、もてなしも結婚も、あらゆる思い煩いや心配事を背負い、心が乱されるものです。そのような中で私たちが忘れてはならないことは、マリヤのように、イエス・キリストの足もとに座って、御言葉に聞き入ることです。結婚生活の中で、私たちは家族のことであらゆる思い煩いと心配事を背負います。しかしそのような中でも、決して御言葉に聞き入ることを忘れてはならないのです。

「主に奉仕する」ということは、何よりも「主のそばで御言葉に聞き入ること」です。私たちがイエス・キリストのためにできる最大の奉仕は、イエス・キリストの御言葉に聞き入ることです。私たちは、イエス・キリストの御言葉に聞き入ることを忘れて、イエス・キリストのために何か奉仕ができると考えるのは傲慢なのかもしれません。イエス・キリストの御言葉に聞き入ることこそ、イエス・キリストのためにできる最も美しい奉仕なのです。

この奉仕は、結婚している人にも全くできない奉仕ではありません。もちろん独身の人のように自由に多くの時間を費やすことはできないかもしれませんが、しかし、御言葉に聞き入る奉仕は、結婚している人にも、その気になればできる奉仕です。その美しい奉仕こそ、結婚生活におけるあらゆる思い煩いや心配事に、平安や希望を与えてくれるものです。御言葉に聞き入る中で、家族における思い煩いや心配事に光が射してくるのです。

3. 時は短くなっている

最後に、独身であろうが結婚していようが、私たちクリスチャンが心に留めていなければならぬことに耳を傾けたいと思います。

パウロは、29 節で「**時が短くなっています**」と言っています。これは、イエス・キリストがこの地上に再び来られる再臨が近づいているということです。イエス・キリストがこの地

上に再び来られる時には、31 節にあるように「この世の有様は過ぎ去る」のです。だからこそパウロは、「今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい」と言うのです。

私たちは、この地上で結婚し、家庭を築き、家や財産や地位や名誉を手に入れます。そのような豊かさの中で、いつの間にかそれらに依存し、イエス・キリストよりもそれらを頼り、イエス・キリストが再び来られる時にもたらされる救いの完成や神の国の完成の喜びよりも、この地上の豊かさの中での喜びに心が奪われていくのです。

イエス・キリストの再臨を待たなくても、私たちの死を迎えるまでの時は、確実に短くなっています。一日一日、確実に私たちの死は近づいているのです。私たちが死を迎える時、私たちはすべてをこの地上に遺していかなければなりません。夫や妻も、子どもも、家や財産も、地位や名誉もすべて遺していかなければなりません。聖書にはこうあります。「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは永遠に立つ」(1ペテロ 1:24-25)。私たちは、すべてを遺していかなければなりません。そして、この世の有様は過ぎ去るのです。では永遠に残るものは何か？決してなくなるものとは何か？それは、「主のことば」です。主の言葉こそ、永遠に残るものであり、決してなくなるものです。だからこそ私たちは、どんな時でも、独身であろうが、結婚していようが、御言葉に聞き入る奉仕が大切なのです。

おわりに

私たちの人生には、必ず終わりが来ます。この世にも必ず終わりが来て、この世の有様は過ぎ去るのです。その時は、一日一日確実に近づいているのです。その中で私たちは、過ぎ去ってしまうものを頼りに生きていくのではなく、永遠に残るものを頼りに生きていくことこそ賢い生き方です。永遠に残るものとは、主の御言葉です。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」(ヨハネ 1:1)とあるように、主の御言葉とは、イエス・キリストです。イエス・キリストこそ、私たちが永遠に寄り頼むべき方です。独身であろうが、結婚していようが、この方のそばで、この方の御言葉に聞き入り、この方と交わって生きることこそ、私たちにとっての最高の奉仕であり、最も美しい生き方なのです。